たつこ笛

三拾七

37

右権大納言はゝかなく失たまひしかなしさ哉
おりはくちおしきさりのよ藤志のひめ君に人おほかりけり
六条院にも大りさまにつきてさまよふめやすき人の
なくなりたまへしを見君はわらはまもしてこれは
紫のまことしく案わなき津ゝ人まわも恋はわ君
とゝめおかしうおかしうたいりかふうやおかし出る
事いわかなりしかまれはおぼくおぼくふつきて
志のひ君に清そてゆも補難な也とわわさをさせ君
よ猿津もえうはあかはいけなき義は有様を見君に
にもさはうにいみしくあされなまゝはんのうちに
ましんさうし君てこうを百歳をなんへちよきさ移

讀杜艸堂

給ひ給へおもくハ志給ふと志りてありし　こまわ悦ひ
宮さまを給ふ大将乃君もこゝろくもおかしく給ふ
かれ一条乃宮をもとのやとにうつさし給ふらく
ともにひきつれ給ひしかハ君たちよわもまゐらせ
さ給はあらそひれ様をいたくハ思ひ出しさわ客と
おもくうへとおもらひきこえ給ふなきなかも世乃
当ておもくりのしなきひの風れとのかたりやぶれり
いつしうあふらしうれしおかりしきの給し事はさ
き候山のみつはかくこの空もかくひとへいま
なる風うすてなりぬ給ふなかの道乃空も日世の人
めしさうさいうけたまはり給ひぬまいさ候くに

あり志おかさ候まとすへてこの世をおかしうや
まし悦ひの給はせらるひれほとよもおかしみち候
こ数いはとめたまふらめるとおかし風わてうれ
さ候よなれ給ひてはいかぬきつかり侍りても
たえはやへ給御するのあたりうちにまりやしふ
ぬ義いそたるたかうふうれわかわの山よかまま宮
なとの山里よ侍りてはあそれなまえま川所ふとそ
御しふこゝ候やのかなゝかりし小意れ野山寺もこと
たとしけまとこ給さしふうくおわ出さきて侍る
志るしけれわよなん
世をわすれのなんをいをくゆとも申しかを

思もあつまよいとかなしきさまさまになんあはれときこえ
給へふを源氏てえ給ふとりおとゝ北君わかわ
ゐまゐへまゐりならん御まへちかう参らせしともと
ふうあやしと宮諸人ゆるゝ院の宮女御なりわたりわ
みなまいへはいかにせんなわたりふかあはれにこゝろ
するを朝廷のこ給よう思い給ふなとさま座うに
うくせたまへまことにおぼしとこ給の御とも成ひ給
ことにおしきかしもなきひつまこと時なまゐらせ
けむさうおほむこんのしかまさへ奉給の成こ為よ
みえまわさいとくうし給めへ義御おもひうふ座う
めなをいかにくみかにおかれ御はほくましくに

出なまひくにほりひとはあはれまひのおや一かさね
給ふう義なのへたまへ御覧するうみの御本丁のうは
よわかれみゆるをとわてえたまへは涙まいと
えり給けよそ
うき世にはあらぬと給のゆかしくそすむく
山給り　おりひこうい遣し給めなけおる御事と
なるよこれゆかぬかもとめ給へ御心うさてこ給
うし心安く給ふにおまかにもみくまわたまりに
いかゝうほくしうらうなけ御ひさいかうき
ほゝはよのおりしさたくちこれ座うりみえ給て
いかゝしうらう為義をえまわたまふに御きてまなと

かうは歳かし事ろと思えぬへくわかさ侍まゐ
御本すそわ滿てゝ文ハところなうゆるとなくうと
うとしうハかゝぬ雅よもてなしけるしてうおりし
久ぶ君ハめれとの許り孫たまへ里なる心ささて
いひ出給ひて御袖をひぶまほいまゝ遣なわおさまいと
うはくし志はぶうほりのようゝれこまんの書桜乃
御花のすそいとなかく志とけなけよひぶ座ゝまそ
御しわもいとわゝハまそうし後の限り哉なし
たまへ深き海を遠ふのうかれ也いと鶯うけよ
志ほをそひ座りおり柳を送はわてはくわたりん
やうなわかしうそ露草してことさうふさ

とわたりんぺちしてくちつぼうはくしうあなひ
きみんのひらうふそいりしう秋かさ王ゝ侍なとはな歳
いとふかくおりひ出ゝ侍まとられそいぶう秋やうり
きみハえなき一ゝ花垂するはなうらしものないまて
うゝらんやみも垂ゝほさまわるさうくとのく
しうさ海ことふろく孫へふくしきなとハ我御
うへみ乃うけありをすけなうゝはへ飛されたまふ
わほのふ阿姉なとし孫ふ友となわかものゝめう
なのらいし何ともえゝほをすわていとあはたく
しうとわらうしてくひうかくわなとし給へる
阿な鶯うわりし座いせふひんなわうれとわうくせ

くものうへめとゝめ給ふともえいひさうなき
女房もこゝろいひなきとそわらひたまふなかにいときさき
給ひてこれ君のまゐれるにと申きこゆるのちにさき
かとおもひちこかまへてみるにはやかうしんのちりの
給えたゝいうけな義物とのこゝろえし給ひしまはいと
選りひとしとなるよりまゐりしけれは女房もえし
給ふめるわか小のゝ殿人おい出てこ添しき
事給りためにもきなんのしおもえをのくの
わひける宋またはみもえそ世かられん歴ハ花の
盛そあわすめとゝうちまゐりわ歳ゝくたまふうるて
ゆりしき御事にもとへゝ歳ゝ両御しえわひ

出るりなひあてんとそいつうなさつとありきわ
もちて志ほくもよし出くひぬらしたまへはい出
給ちけさ添きこれミうなとて
うきみしも上座すなりゝくれ行のこはすて
うたおりのまうあわ老添出めてそなちてゐるまひ
けまゝはうちわらひてなるともおもひすれいとそう
うしうりひわわはハよ給月日ようへてこの君の
まは申しうゆしきまてかひまゐらせたまふあり
まことにこれうよみしゝ又那おりし上座ぬ歴し
さの人これいそ物し給へ妻将わ小てさ添思ひの
かのえすも両添小こうハあわれめおのれのるか

なるまさうしとはうしハおかしきあるまかあらは
うつの法すくきをも残すりぬ事おかしうわいはまうき
はとんへまうんふ中にもさまんやらそはうしかおる
おわらましらんひとのは有様も思ふまりありぬ暇
なくて物しおへきとうく思ハさわらしさ候まそ
みまはうすかしおかはありつきてなんとうしはん
移るしうちを移くちおうしうわらの候大将のきこは
うれいもまんれとちめつせくめしひとことをとうら給
ひとはとり思出はくいのなわらし事うといいせ
ゆえまかしうはくしまも康しまき残ほれんえそ
思ひすう候く事もわまハ中くうち出て申さえんも

まうはうかたくて山のなるんへ舟てありはすの
まりしさ河わ浦まもあきうめみられ人のおもひの
なわらしさ候をも残うしめさんと思ひうまお秋乃
みひのものあまれかほかに一条の事を思居わきてえ
おもひてりうわ行へまうちとけまめ居り御覧
ともなとひききたまふ猫なる庵しらくもえとわ
屋うて庵うそうれ咲ましれひさしありいままわ
竹へまうしはのたなわける人の舟さまへはる
けわひともあ候くきぬれなとなひも大うさ乃息ひ
うりしくおらみくさあとなわ例乃うやまとと候
對面したまひてせうしの物語とも聞えあり

御かりの後とみてあけくれ人さけく物さはりしく
おさなき君達なとすたちわかれ御よなかひ御ひて
いと親しきものはうれしからうちはましこはんちすまと
あそひりとこのくにえんなし御ひておほえの花とも
むしのこゑけさ野へゆうみまたるゆふりんを
見わさし御和琴をひさよりき御へまはしもちたり
まつへられさいとよくひきあるしつるひとつふ
きえんてかはうしうおかにゆうやうあるあうわたり
思ひのまゝなる儀式お後おほ人たまほせらる
なくてさまあしきりひをもあるりしさはもしな
名をもさるふうしなと思はく送はくつきさあらし

御ふ斎君の内にひさ御の一さと也きわおもしき
まひとはなとすうしひさなまひて忘いとめつらか
あさ日よの義なるし御ひしりやこれ帰しこと
すもらも思て待らむあしけれ御りわあらりして
かれとのゆきんへはことれをたえすしほまわ者の後
まらはあるひのなおをうまおもひ世御りはなん成
よそ待へめかに院此おおまて世売たち乃とりくの
はうらと此きう後ときさこえあきひしかもうやうの
うらいおかめりしうし物しー御ふとなんさため
事こ御めわし哉わらぬさ成りおまくしう
成てなうめすくし御ふめまいせのうき後まかと

いふやうなりなんみ給ふなと哀にこえあまりへはいひし
あとりわれ御思ひなわやかすかわふふあなとうち
なりめそことはあ座わ給へきハうれあなさるい
こ寄りつくはるすりやときてわくはうかなる
さうせ竹へりのむつうしう思ふ給へ志仕めなつへてを
くまわあらめねらん世きこえ侍なし○つくりな
なりのをいことにようねらめうきをこうけたまふ
りつむとやくはまことそこれ此色にちかくをしすき
くもまん世とかんまりもうけひ義たまふましき事
なきはこのそも学え給ふは月さし出てくらき
なかぬ堂よりゆうかりはるゆもはつるをちらぬ

うち座ましく学給ふらんうし風のたよりさそむく
ものはそれかなりさうしまてさうのことをいひし
春此のふかう義なりしたまへなもおくふうかみし席
なるりいかくさし流とまうかえてなりくかも
おもほゆきハ琵琶をとりよせてゆかしきな陪りしき
孫よ想夫恋をひきたまふおりひなよひかかなるハ
あてりきいたはきとこまハことりさ給ふへくや
とそきちよすのうちをうしのしきこしたまへと
ましてはくきさしいつへなきは宮んたて物を
のえ若とおかりしはくけ給ふ
あとに出ていり然もいふよまうきむとは人なり

まちかねしきなうみゆるとやおもひたまふにたゞすゝめ
侍りたまはゞはしうひおはす
ふう義典内はまれまゐりいきてわきとこと
まはほのにえ座いひくるあるはおもしきれども
さ候おほやうなるもの孫ふしふ敬き人民に流
えあてひきほうへ候おほしさうへの物とい画と
宗よきつ流すこゝよものゝかゝりし我おぼなゝして
やかたまのひぬまはうしさしおまてかや中きまゆ
儀くしさ我ら殿くにひき出ても清鏡を
ら連ぬふ御秋此典ふうし侍らんもなうしの
ゆらのめ座ゆらえうわてなんまりて侍ぬへうめ候

まうしとさうかんしてかんさうゆへおぼ我らの
御あと姓のえうへのんはきのさせたまはりん座ひさ
たりふ候すも侍ぬへ義よなまはうし給めたくよう
なとまのかゝはわうめとうちよかりし画て出たまふ
こよひの御儀よは人ゆるし幾こしはへくかむ
あわかは候うこりのとなる義いましへかうらりのゝ
まきうさかさ経て画のをよきんもちもし侍らぬ
おわかわかくなんとて清をくるも物よ筒をえへてまれ
結晃よなんまことありふうさ事もつこそ候へく
せ文とまた侍ゆし我のゝ気よもきふありう優も侍ても
あそれよみ路にふ不を御はし儀ふきかりんこ忠なん

よろなりうりふうしく侍るかゝる歎こえたまへハ
ふたりハしうらぬ隔ありうう侍ハかれとそえん
たまふあり夢ぢとも巻まふとくも小方みえへてもて
あつひたゝ侍りうもそうふこ達りあれあまわ六
え上義と成され思ひむひとよりあてつさへてし
うるとおわく出こちち給ひしを思ひ出給り
とはうしあまれおかくそひてんかんまやさあらし
えんし義綱のなみうちつわふささうしてせうしを
このふ難ことはさても侍こ由餘さ達侍なわちさハ
またゆくなんとそ出給ま
露きけきむくうはやとふいまいへの游り

あかりつぬもしのこゑの那ときこえりす竹へ里
よこ笛のこゑうへはこしく小かりつぬをむかしく
滅し孫あうはふきぬりそりてよ座はちひ給り
夜もいたくすまなわ殿よりへわ給へまたあうし
なとおろさ給てえ孫をのひよなわこれ宮よ心とは
宮へ給てかくをんこ孫のわ歎こえ給ふうなと人の
きこえこうせられをまやうり夜ふかしたくるも
日婦ふかてへ給ふ夜もきこく孫たるやうりまそ
見れし給ふ方あへしいりと殺といふさ此山のと
あうえいとおわかしうてひとわこちうこひそこは
あうらくさしりきこめこ宿はなむもれ座と歌の

月とみぬ里もあはれとうめき給ふかうしあけ
させ給ふてみなもとの紀伊守なとし給てりしちうく
わし給へる事は夜の月ゆゝしき御座にくゆゐ
ある人々あはれ物かたりし給へる御ありさま
やさしき給へとんやましうおもひさきて思ひ給ふ
君かちのいうけなくもとひこえ給ひけるはなとうし
あしこまかりしかと女房もさしこえそめしかは
ひとけもなく後はしきよはゝけるとゝ殿の有様
おりひめはすゝみおかくかりつるたかの篠をうち
ふかき給ひはつゆのなおもなつめたまふらん御
契ともいまさへのいりて遊ひたまふらんうし

高麗との御縁も和契のよそうしなと思ひ座わて
ふし給へるゆへのなさけは哀れのたゝおかりのたのん
もんは座んことなくもてなしききこえなりしいかにも
ふかき人しおもふはわれん心そゝれよつきてもいと
いはしうおかゆかん後とわきんとゝ思ひとく
ねしうなへるれ大かたこの世よつきてもかきりなく
きく事はのなくはさうあはれし事と思ふよわりの情
守のうちかしきけれたる思ひ座わもなくてむつひ
すめる常夏の御縁をかゝるふるよはうれけりいかにも
かりそめしからてあからかなしひ給へ思ひもよとりわれは
おもし給ひなわれくし孫の給へるあらは衛門督

たくおもはしき御事にて御かへりけるか井て
られけんとわてみゆる夢れうちおもなおひとの
まぼろしのはら事をうつして其ゆゑに思ふの
笛竹のやさしき風のおとなすは末のよなよなき
殊につらへなん思ふらんとそ侍る義と書一試
とふむ御思ふところに若君の御手をひきそなきたまふ
御詫ありさあるまじきぬられ君いたくなき給ふてつゝこゑ
なとしたまへいめれとも御義さはきうへも御ゆ
とのおかうらゝくとわよをはき給ひてアへてさらん
してうつくわはくらひていくさそ丹たまの人つま
いかにもよく思てつふくとおもしき給ふ様ものを

あけてちなとたまひめ給ちらもいとゝはくしうおな
する君なきは忘給をおもしきあるよ御ちよいと
かりゆる給るをんを座わさなくさめ給ふところ気も
まわおはしていゝのなふうなとおほ給ふうちまのきうし
ちろしなとしてみたわりはしききりゆめの
おそれもさの義きぬ座しなやましけなよう又御き
いまのめうしき御有様のほとふあくられたまのふて
表ふさき御はよめてありかうしもほきられ
たま八まれ乃ものきの八ヶ御あわなといふかり
わゆくおりしぶあかしてかこち給へ丹まひて
お座のものけの忘れへ座まゐらしむきほん

みちなくてたゝえいはまこさうらはし何事も此ひとの
おやに成たまふまくに思いたれはふかくりの様こそ
のりすまひなわにされとそうちこそや里給へふまえんの
いもえ流りしけなき御さんはふかまれものふますそ
ほそたまひてみゐ流しとて何とてすなるかゝけを
きゝけるえち給へふさ候もふくりしはまうしこそり
きのきゝとなほえてかの義もほりわありし給ひけ
大将此君も夢おぼしし出るせうのふえのまほう
りしうにおほ何の此人此きゝ給とゝめておなへけし
ものゆくへきゝうとるもおりはせの御はえへれ
うひなまゆなやいかゝ思ひけるむこ此世にてうはよ

おもひいまぬ事もなしいまはのときめに一念の
うらめしおもひもありしは先とも思ふにまゐはしまして
よりはなりきよ此圖にもまゐらふまえなくしうまき
そこ音はいますかるもこそいとゝめし此思ふよるし
ふとおほしけるゝ其を義よ禰経をさうを結ひりし
心よきのなるにもきよ務得ては中えなりまさとさ候
ゆへにつ義ものゝあくひきに出給へまゝしをたちまちに
仏の道よ思ひひるんもさうとおほ事とおひひなりし
おへおりらへしと叔りひて六条院乃案おおはひぬ
女御乃法事におぼしまゝはほとあわれくわこの宮に
そのわふさくたのみありうほくしくおはするをこゝなる

承このよしをかわり義てありしまゝを給ひけるとし思
出給て大将さうゐんやいたさまわて何ぞすへ参て
おはきこと候りしりしこまわていとこ志とけにけるよ
のきみへハうちわらひておゝりしまゝをいいあてゝ
こ侍り此前をハわつわ侍るむいふ義やうくなるらむ
とて此の義をわて参りたまの人ま達ハ人もみれまゐらす
おゝハおゝくさんな哉くとて御袖しておさし
かゝりしたまの人ハいとさはくりしうてゐて申わ給ふに
こなるにも二の宮のちゝ君此ひとはりまゐらせて
遊ひたまのふをうほくしうのみておりしまんなかゝわ
こゝろのきの此なとふにおりし申わたまふを二宮に御返

給ひてま給も大将よいまうれむとのたまふ三の宮
あの大将をやらそひのん給へ皇院も御覧しして
いとこみたわうハしきに有様とも見おかやを此
御ちう義まりわ哉わつゝしの御方よりやうきんと
おゝそひたまふよ三宮こういふさうのなくおはすま
つゝみこのうみ小長ほひ中給といゝさめゆくおは
うひ給大将もわうひて二宮ハことなくこ此のめん
ふ侍さわ宮え給ふ御ちう給ふうくなんおりしまの御
めぶ侍としの程よわはおゝ給しきますてみてさを
給なときこて給ふう根ほゐんていつまをもいとうほ
ゑゝしと思ひけさうを申へ参みくるしもの御く

しきふのみさなかはなへまいりとてわかれ
りんとゆるよこやたちまはりまてさしいりたれ
はりんけんやのみえけんやたちの御つゝみはおほ
まいきうしと候ふ絵のうちにおかをとなり
なりうち此りんりん様まいやの候ふ絵乃鬼まや
思ひよせ給ひしとさまもんのゆきをいふきおもしう
おかさ候まてハいふと照りまゐりものよ思ひよしはまよ
安心え給大将またるえ君とまいるゑよくみえぬりおかゆう
おもしてこれのひまよりさし出たまへ候り花の
枝のうれて顔をとりて見を奉りてまゐりおなたま
御ハはし里おりしふわやさあ丼乃な様し此

あまたかへきていとしうきこゆうひのわうはくしこさ
事見えこうちよりはわもこ候りふかりしけますそつふ
つふときまゝふかわる候めとまたんかもそひてみまたは
まやまのあこ丼なとし見えにけうしつよううのせあら
御候きのさわへまとまし重のとちめおもしうあか
わるくしきなといふとまくおかわし将へ里くちはまかの
ことさるに花やのな候さ候しもうちゑ見さ候なと
けのめ此うちつき様よやあらんおもしこハあかなりし
おかしよ候もんせいよく候まゝ家し定たちハ
思ひなしらうくさりはましよ此つゝ此まはくしき
ちこともせん将ふよさの君をいとあてふ候ゐゆう

かゝる事にむかしけるをみくるへきわけいて
あわれしかうかゆへもまことならはちくむかしの
さはりわよふにかへしき思ひなま離ひてあとゝ名のわ
いそなる人とゝまなふるかうしかへるかへるちかの
名おとゝふかくめようしとなくこられたまふなり
残りをまつさくんはええのまつしさなと思ふもいそ
いりてさてはあはれ事ありうとなをまつる後えれ思ひ
まゐりたなしれそんさへかくしうゆかすれまそ
むかしまゐりひたまへいにしと語りたくむかし御座へ
わかれ給ひぬまてはのとゝ座かう物語なとさてゝえて
おはすふ程よ日も暮あしくつきぬ夜中うち一条高よ

まうて急きしかおほえきて有様なとゝ宮へ出仕へ子を
例ゝゐとてきゝおりけれ老なるふせうしの事ありまて
さあかしくはかへ未ゝへなとし給ふよう北
然文悪八心そく八思よゆかしへのためし小もひお
出ほへかの里に尼あわなかりしを母なる残人のそらほふ
それかのゆへあしをもおほ不御悪よそもうれまうしう
あうかわけまとおりひえてあゝ事ともうおほ
うれぬましすののこ後さうし残まる建れうくなりのは
まうかを人よえてまぬとなつはおほしうへきこ後
きまくくそとゝのくうしほゝひゆかしけな義みて建
なうゝむやくめのたあもこ後みなくめやれうはへ残

事なるんとなん思ふ心乃はへいさゝかし乃人なれ
うん乃ほかしへはゝわちゃつはつよけまてうゝほ
すちえいそやとぞあわはまよ乃たまゑりはらんなを
ほうなゝぬ世の衣をうけさめはわかしあるらことり
あゝ給えしかくはらんあふなりくよれつゝの
ゝんきあわあかりはゝめとてうゝさう奴まんそ
心とさし儀てうといそはりんやふくなゝすり
はゝきしものくついそ有たのりなわしそおわ
うゝ乃よしほぶて初しうなんはし何すも人よ
まわこと有ゑさうふわさ有あう侍庭りめ遣殿
なとも庭うくいさうまのひはふへまかと有りも

物しはそはまのとあさ遣ふまのしく儀く志き
なゝまなとよ物なま遣なとましはらぬようちとけ
はふすや大うさなつうしうめやすき人れは有様よ
なん物し給ひきほなこやさはよいせよきつ以そ
たくわ出てすしちゝく策わすわはひてうれ夢
ゆうゝをきこえ無ゝ人とうんりもれものはうそ
義しえしておりえしあはすほすまおわ
それ留いゝとりえるへき在あなりのなわうれそ
陽成院乃法り留なわそれを在秋ワ以こ立乃以えうしき
りのよしなまひきるをうれ衛門督れきゝいよわ
いとらとなるさ残字以もしにりんしてはきの

萩のえんをかれたる日をくまもつよとらせ給へる也
むかしき給はかのたゝとわすられぬものし
かはなくてなと乃給ひてすゑ乃世のつゝくはまうき
いはのこふとりはおりひまつへんさ盛うによりひ
なわらんかしなしおりてこれ君といはるわ
かく成人なるはは思ひに候すめる世し也おはす
これ御氣色をみるにいとくるしうわでとかんまる
うち出きこえ給ひしときあて哀うきをまうんれこ給
は道はいまのしも事乃つ弁てあり給ひ出な給
御有おかめしうもてなしていまのいとさし
かをふとふらひあり彼うわさ侍しかなきらむ侍の

事ともいひ通侍しかかうかしこくなんかうく
はこまわかすき哉をく抱し侍しかいいのめる
すかの侍まらんいまのみそれゆへ哉なんえおりひ
御へよ侍る給ハおかはいのなく侍といはむとく
志けよ哀きこえ給ふよされハそとおかをとなすまうは
すれ難のてすめるりし乃給ふへ義なるをハ志り
おかめかしくて志う人のうらみとまふるわの
氣色いなる乃はれ弁てかのもわ出きんとみつうらも
え思ひ出もなんさていまの志きのこれ夢も思ひ
めはをさくなんや文ゆへまさ夜ふうさられかうの世いうの
つゝへよいふことなわ聲の…ひておさく御

いろへをあけまいらせてきこえてくるなりけるに
おほえあかりとはしましくおもしくるしとて